

## 第 11 回外洋加盟団体長会議 議事録

開催日時：2019 年 9 月 28 日(日) 13:00～16:00

開催場所：京都アスニー（生涯学習総合センター）

〒604-8401 京都市中京区聚楽廻松下町 9 - 2

出席者：(理事)

馬場益弘副会長、中澤信夫副会長、坂谷定生常務理事(東海会長)、平松隆、  
菊池邦仁(いわき会長)、宇都光伸(南九州会長)、大島茂樹(東海副会長)、  
作田智恵子(湘南事務局長)

(加盟団体)

津軽海峡会長 木浪英喜、東京湾会長 足立利男、事務局長 望月規矩雄、  
三崎事務局長 中里英一、三浦会長 庄野栄一、事務局長 関根照久、湘南会長 平井昭光、  
内海会長代行 永松馨介、内海事務局長 猪上忠彦、事務局員 北中育子、  
西内海事務局長 小山悟、玄海会長 沼田浩行、副会長 大石昌弘、南九州理事 石川国彦、  
事務局長 市来孝夫、近北会長 高橋利明、元会長 三井祥功、元評議員 阪田吉弘、  
事務局長 守本孝造

(委員会)

外洋計測委員長 八木達郎、ORC 委員長 吉田豊、ルール委員会外洋小委員長 大村雅一、  
キールボート強化委員会委員長 金子純代、国際委員会委員長 小林 昇、委員 鈴木一行  
(事務局)

外洋常任委員会事務局長 鈴木保夫

JSAF 事務局次長 寺澤寿一

(順不同、敬称略) 合計 35 名

### I. 開会のあいさつ

副会長馬場益弘から開会の宣言があった。

引き続き馬場副会長命により、坂谷常務理事が議長となり、議事録署名人に、木浪英喜氏、大島茂樹氏の両名を指名し、議事に入った。

### II. 議事

#### 1. 第 60 回パールレース報告と沖縄-東海ヨットレース 2020 について

主催の外洋東海会長でもある坂谷常務理事より、以下のようにパールレース中止の報告と 2020 沖縄—東海レース開催についての案内があった。

今年 60 回の記念大会であったが、昨年引き続き台風の影響を受け 2 年連続の中止となった。58 回までは、中止になったのは 1 度だけだったが、59 回、60 回と、2 年続けての中止は初

めてで、今後天候の不順でこのようなことが増えるかもしれない。時期等も検討の必要があるかもしれない。

小笠原レースと交互に行っているが、2020年は沖縄-東海ヨットレースをGW4月29日スタートで開催、多くのエントリーを待っている、皆様には宣伝をお願いしたい。

## 2. ユニバーシアード夏期大会について：キールボート強化委員会

金子委員長から以下のように報告があった。

この大会において、セーリングは正式種目ではなかったが、今年はセーリングも加わった。他国チームはジュニアからの出身者で構成されていたが、日本チームは東大生中心の大学からセーリングを始めた選手ということで、健闘ぶりや、短い時間にもかかわらずレベルの高さに皆驚いていた。

委員会としては、女子学生の強化も図っていて、いずれ世界に通用する選手を育てていきたい。

## 3. ジャパンカップ 2020 について

委員長が不在のため、坂谷常務理事から報告があった。

2018年は参加艇が少なく中止となった。2019年度は関東開催の予定であったが、開催場所の特定が難しく、検討を重ねたが、結果中止となった。今後については、2017年に決めたルールを白紙に戻し、ジャパンカップ委員会に委ねることとした。

## 4. 2020 外洋 WH Mix 世界選手権及び国別予選選考について

2020年10月マルタ島で開催予定のWH世界選手権に関する報告が、JSAF外洋国際小委員会鈴木委員から別紙のとおり報告があった。2020年開催は10月18日の会議で確定する。これに対し坂谷常務理事より、2020年開催の報告で準備していきたい、国別の予選会に選手を送りたいが、選考についてはオリンピック外洋小委員会に任せたいとの説明があった。

会に諮ったところ、拍手をもって承認された。

## 5. パラオ国際親善レースの状況について

担当の新田理事が不在のため、坂谷常務理事から報告があった。

### ① クルーザーレースについて

カテゴリーはOSR-1での実施になった。

国内から8艇が参加する。

### ② OP 寄贈事業：パラオの子どもたちのセーリング支援について

パラオの子どもたちにOPを寄贈し、コーチを派遣、レッスンを続けている。東京湾での12月のパラオ親善レースのイベントで28日に日本の子どもたちとレースを行

う。そのための選抜レースが9月29日に行われる。

この指導は、一過性のものではなく、今後もOPおよび用品の寄贈、コーチの派遣を、継続的に実施の予定。

③ マイクロプラスチックの採取について

国立研究開発法人海洋研究開発機構の協力により、伴走艇「みらいへ」及び1艇の参加艇で採取し、分析する。その結果は表彰式等で報告する。

6. マイクロプラスチックの採集と環境教材の立案について

国際委員会委員の鈴木一行氏から以下説明があった。

2019年5月開催の小笠原レースや、オリンピック応援フラッグリレー艇でのマイクロプラスチックの採取を進めてきたが、きれいな海でも観測されている。JSAF 本体でも加山さんとの「海、その愛プロジェクト」で動き始め、オールJSAFで環境を考えている。海外では6年前から採取し、ヨットレースでの採取も進められている。

JSAFの海洋汚染防止への責務として、次世代の環境教育を行うことに意義があるということから、環境委員会、外洋常任委員会が活動を広げるツールの開発のために、小笠原レースで協力実績のある東京海洋大学とマイクロプラスチックに関する環境学習教材の企画立案についての協力関係を明文化する。(覚書を締結)

これにより、東京海洋大学の持つ正確な知見、データ、画像を利用でき、子どもたちへのセミナーなどに講師の招聘が可能になる。

これに関連し、内海猪上事務局長から、WSから日本はこれに対して不熱心だとのプレッシャーがある。「捨てない」を守る。「リサイクルをする」など考える必要がある。また、平井湘南会長からも「ペットボトルは持たず、ポットを持つ、そのためのウォーターサーバーを置く」など、ヨットマンとしてできることを考える必要があるとの意見があった。

7. ガバナンスコードについて

大村事務局長からこれについて説明があった。

「中央競技団体向け」と「一般スポーツ団体向け」があり、前者はJSAFが該当し、加盟団体は後者に当たる。ガバナンスコードは強制力を持つものではないが、不祥事の発生を防ぐためにも、また、スポーツの価値を高めていくためにも積極的に取り組んで欲しいと中央競技団体⇒JSAFへ通達があった。加盟団体に置かれましてはガバナンスコード別添のセルフチェックシートを活用していただくことが有効です。

8. 次期理事選挙対応とその後の理事選出方法の動向について

坂谷常務理事より、今後はガバナンスコードに基づいて選出内容(女性理事の増加等)が求められるが、今回は時間が少なく難しいので、昨年並みの内容で進めるとの説明があった。

また、定年により今期をもって退く旨、説明があった。

また、選挙理事の後任としてしかるべき方を推薦し、男性3名、女性2名の立候補者を確保したい。立候補者については、常任委員会に一任して欲しいとの説明があり、出席者はこれを承認した。

理事選の日程については、資料に基づき説明があった。

#### 9. JSAF ビジョン策定について：

坂谷常務理事より、川北専務理事を中心に委員会が発足し、全加盟団体、特別加盟団体に対し、意見を求め集約し、現在策定に向け準備している。との説明があった。

作田理事より、外洋湘南からは、平井会長はじめ女性の会員がこれに積極的に協力しているが、外洋からの意見が少ないので、もっと意見、アイデアを出していただきたいとの意見があった。湘南平井会長からは、委員会ではヨットクラブの意識が少なく、なかなか反映されないとの意見があった。

#### 10. 2020年東京オリンピック応援フラッグリレーについて

坂谷常務理事より以下報告があった。

埋まっていなかった、九州地区は周航を果たし、座間味へ渡った。また、秋田—北海道間もつながり、北海道も周航、残すところ、四国ルート、福井—九州間を残すのみとなった。

2020年には、4枚まとめて組織委員会に渡す。その方法は、大村、中澤両氏で現在詰めているところ。

#### 11. 専門委員会報告

##### 外洋計測委員会報告

八木外洋計測委員長から以下報告があった。

① 外洋計測委員会では『IRC』、『ORC』、『PHRF』の3種のレーティングシステムを統括しているが、『IRC』をメインレーティングとしている。

IRCの取得艇は2013年が最多で以後減少傾向にある。

② オープンレースにおけるデュアルスコアリングの勧め

正式なレーティングを持たない艇、未登録の艇でも参加可能なレースにおいて、『IRC』、『ORC』、『オープン』などのレーティングの種類によるクラス分け

が多くみられるが、レースに参加する楽しみだけでなく、レース本来の競い合う楽しみを味わうことが可能な、ポテンシャルごとにまとめたクラス分けを提案する。

全体を『PHRF』に統一してスクラッチシートを作成し、ポテンシャルによる10~20艇前後のグループ分けで、レースと表彰を行う。レーティングを持つ艇に対しては成績表のみを配布する。これが、現在JSAF外洋計測委員会やレース委員会が考える『オープンレースにおけるデュアルスコアリング』という考え方であり提唱するものである。

続いて、吉田 ORC 委員長から、ORC については世界でも取得する艇が増えていると報告があった。

## 12. 新会員システムへの移行とそれに伴う登録艇システムの整備について

作田理事より、2019年3月から新システムへの移行を完了する予定であったが、システム不備により、7月からの移行になったこと、このシステム移行において改善も行われ、艇登録システムにおいても以下が改善されたと報告があった。

- ① 艇登録に関しても会員登録と同じように、団体入金日、JSAF 入金日の記載欄を設けた。  
これにより入金一覧表がエクセルにてダウンロード可能となった。
- ② 艇登録証明書の発行が会員ページからも PDF での入手が可能になった(会員証と同じシステム)
- ③ JSAF 直接払いを採用している団体においては、艇登録料に関する事項がシンプルになった。

現在艇データについては整備中で、今後不要なデータはすべて削除する。

今後の課題としては、抹消データの整理、管理が必要。

## 13. 外洋艇登録関係書類の PDF 化について

前回の団体長会議において、承諾された「外洋艇登録関係書類の PDF 化」について、3社の見積もりを取り検討した結果、『株式会社 ベーシックシステム』に決定し、発注、6月末に納品された。これにより、上記艇登録システムの整理、拡充に役に立っていると報告があった。金額は194,724円だった。改めて、本日外洋内海、東海、東京湾、三崎、三浦、湘南に対し1団体32,454円の協力金をお願いしたと艇登録ワーキンググループ長である作田理事より依頼があった。

これに対し、依頼された6団体から承諾を得た。

## 14. 外洋合同委員会の案内について

今回担当であるルール委員会外洋規則小委員会大村委員長から、以下のように説明があった。本年度は2020年2月1日(土)12:30から北海道函館市函館アリーナで開催する。今までは、開催の委員会側からの一方的な説明に終始したが、今回は、「レース主催に係る委員会合同のパネルディスカッションも開催し、各団体からの意見質問も交えながら双方向での会議とし、より良いレースの主催、運営に役立つ会合を目指す。また、以下の講習会を翌日2月2日(日)に同時開催する。

- ① レースマネジメント委員会外洋小委員会  
9:00~16:30 NRO レースマネジメント講習会
- ② ルール委員会外洋規則小委員会  
9:00~12:00 外洋レーサーのためのルール講習会

## 15. その他

### ① サバイバルトレーニング参加報告

9月に北九州市で行われたサバイバルトレーニングに参加した鈴木保夫氏から以下報告があった。

トレーニングは本船等で義務となっている「STCW」の基本訓練が行われる施設として認定されている、「日本サバイバルトレーニングセンター」(NSTC)で受講した。施設は訓練用のプールや、ヘリが水中に墜落したときの水中からの脱出訓練や、遭難者がヘリに救助される場合の訓練設備が揃っており、実際に消化訓練を行う施設も整っていた。

消化訓練は、受講者全員が炭酸ガス消火器、粉末消火器、消火ブランケットを実際に体験して訓練が行われた。

講師はフランスにおいてNSTCと同様な組織に所属して実際に海難救助の経験がある2名のフランス人が2日間サバイバルトレーニングを行い、メディカルトレーニングは日本人の森村先生が1日行った。

メディカルトレーニングでは、実際に縫合の研修キットを使用して、傷口を縫う訓練を行った。

トレーニングには大坪氏も参加しており、「このようなトレーニングをやりたかったが資金面で難しかった。」と外洋安全委員長として挨拶をされていた。

これを受けて以下意見があった。

大村 私も受講したが、フランス人の講師が実際に救助活動に携わった経験では、皆さんが持っている「笛」は波間に入ると聞こえず役に立たない。

またパラシュートフレアが発火している時間は以外と短いので、救助機を視認してからパラシュートフレアを使用した方が良い、との講義が印象に残った。

庄野 同じく参加し、非常に良かった。今後国内でこのようなトレーニングが簡単に受けられるように是非して欲しい。

### ② 外洋系の今後の方向性について

議論は白熱したが、これといった方向性を見ずに会議は終わった。

坂谷常務から今後は勉強会を設けて検討をするか提案があったが、各団体の自助努力で考えることで議論は終止した。

以下、議論での主な内容。

永松 湘南の会員増加の秘訣は何か。

作田 事務局の迅速な対応でしょうか。会員間ですぐに事務局が対応するとの口コミで、湘南水域以外での艇のクルーが登録しているケースもある。

平井 ビジョン委員会の川北専務と話した。会員とは Face to Face が基本、外洋系はフェイスに丁寧。Web からの直接登録が会員サービスの低下を招いている、直接登録で安易に流れる。県連の力も失われてきている。また、ノウハウが低下してきているのではないか。

国体には、全ての県からの参加が必要だが、セーリングは海なし県の活動は難しい。今後は、海なし県の会員増強の 1 案として、海なし県と湘南など活発に活動しているところとの提携活動など、協力体制を引くことにより、海なし県の会員の活動も活発になり、メンバーも増えるのではないか。

永松 内海も心掛けていますが、メンバーの会員システムからの直接登録により、兵庫県連や関西ヨットクラブなどに流れている。内海の会員減少は他団体へ流れていることも関係している。いい方向があればと思う。

猪上 数十年間セーリングにしているが、昭和 40 年代、ヨットは高根の花であった。やってみたいスポーツの 1 つ。

現在は入り口が見えない。過去は排除する活動があった。日大は 100 名入るが 90% やめている。新人歓迎を対応するクルーザーがない。

ヨットハーバーにも新人への対応ができていない。声をかけるセーラーがいない。大学までやった人をクルーザーへ橋渡しをしてあげることが必要である。

若い人へ声をかける。

中澤 学生マッチを 8 回開催しているが、ディンギー経験者が外洋系の船に乗って活動している。ユニバーシアードなども東大ディンギーチームであったが、学生マッチを予選としていたので参加した。J 24 全日本でも学生マッチで活躍した選手がいる。

坂谷 加盟団体で活躍できるまで時間があるので、それまで母体として外洋系が成り立つのか？

平井 追加すべき問題としてマリナーでレースをしていないセーラーをどのように取り入れるのか。

ispa に登録して活躍しているクルージングセーラーが 6 割くらいいると思う。

共同してイベントできないか。活動を吸収して力をつけることができないか。

庄野 私も ispa の出身。アメリカでもヨーロッパでもクルージングセーラーを育てている。そのような方を取り込むことがいい。

小林 外洋レースを維持していくことは大事であるが、連盟全体ではオリンピックセーラーを育成することを構築している。

琵琶湖はプレジャーとして楽しんでいる人がいなくなった。

ヨットを新たに始める人は定年間際である。レースの世界をケアするのか、

外洋加盟団体としてシステムを考えられるかが外洋加盟団体として生き残るすべである。

ヨットクラブにおいて、JSAF 登録するという意識が低い。

ヨットクラブは全国にあるが、連盟会員登録はゼロがほとんどである。

以前は特別加盟団体に登録できなかったが、今では本部でもできるようになった。

加盟団体の役割を明確にしないといけない。

外洋内海は会費が安い関西ヨットクラブへ流れている。

コントロールできなっているのが大きな原因である。

外洋団体としてレースのみ育成するのか。

ヨットの事業としてレースは簡単であるが、ランデブーなどのほうが難しい。

ヨットクラブをどうするか。

クルーザーがオリンピック艇種となったがことは大きい。一般の人がヨットを

イメージできるようになることはいいことである

坂谷 外洋東海では130艇400名登録しているが、レース参加は30艇くらいである。

作田 連盟はレースではなく、普及も念頭に検討しているが、JSAF で作成中のビジョンは現段階では学校教育のようなビジョンになっていて、応援する人も取り込んでいきたいと思っているが、その方向性がまだ見えていない。

クラブ0人とのことだが、湘南水域の特別加盟団体のクラブ員も含めて、外洋湘南が取り込んでいるので、実際は0ではない。クラブが会員登録を怠っていることではない。

菊地 いわきでは震災でマリーナ活動できていないので、ディンギーを卒業した人を拾ってあげることができない。

など

2019年9月 28日

議事録署名人 木浪 英喜

議事録署名人 大島 茂樹